

国際教育研究フォーラム

第 105 号

2025年 11月

国際教育研究所

目次	頁
語学教育における生成AI活用の可能性	小山悦司 1
留学生の進路指導に求められる視点とは何か	宮口徹也 2- 8
グローバル人材が集う研究拠点へ	赤司治夫 9-14
編集後記	14

語学教育における生成 AI 活用の可能性

国際教育研究所所長 小山 悦司

国際語学教育機関「EF エデュケーション・ファースト」（スイス）が発表した 2025 年度の「英語能力指数」によると、日本の英語力は世界 123 カ国・地域中 96 位で、初めて 5 段階の評価区分で最も低い「非常に低い英語能力」に分類された。約 220 万人の非母語話者のテスト結果に基づいた調査で、日本は前年より順位を下げ続けている。「読む・聞く力」は比較的スコアが高い一方、「話す・書く力」は低い傾向にある。

日本人が英語を苦手とする理由の一つとして、「恥」の文化に根差したシャイで控えめな心理・態度が影響しているとされている。「間違える＝恥ずかしい」という意識が強く、英語を話す際も「笑われるのではないか」と不安になり、完璧な文法や正確な発音を求めるあまり、積極的に話すことをためらう人が多いといわれている。さらに、母語で十分に生活できる環境が整っているため、英語を使う必要性が低く、学習意欲が持続しにくいという特徴もみられる。

また、日本の英語教育は依然として入試をゴールにする受験英語の比重が高く、「聞く・話す・読む・書く」の 4 技能を実践的に使う時間の不足が大きな課題とされている。2022 年度からの高等学校の新学習指導要領では、これら 4 技能に加えて、自分の考えを相手に伝えたり議論したりする「コミュニケーション能力」の育成を重視する方向が示されている。

そこで期待されているのが、Chat GPT に代表される生成 AI（人工知能）の英語を中心とした語学教育での活用である。生成 AI は語学教育に革新をもたらす可能性を有している。生成 AI が児童生徒、学生の英語教育にどのようなインパクトをもたらすかは、ネイティブ英語圏を除く、アジアなどの各国にとって共通の関心事となっている。

従来の語学教育は、一斉授業や画一的な教材に依存しがちであった。しかし生成 AI を活用すれば、学習者一人ひとりのレベルや目的に応じて教材や会話内容を調整する個別最適化が可能になる。例えば、AI との会話練習の場面では、発音や文法の誤りが即座に修正されるので、間違いを苦にすることなく積極的に試行錯誤を繰り返すことができる。

また、24 時間いつでもどこでも手軽に利用できることに加えて、個別最適化によるモチベーションの維持向上が期待されている。生成 AI の活用は、語学教育を「知識の習得」から「実際の活用」へと根本的に転換させる大きな可能性を秘めている。

留学生の進路指導に求められる視点とは何か

－キャリア教育の実践とアンケート結果から見てきたこと－

岡山理科大学留学生別科 宮口徹也

1. はじめに

筆者の所属する岡山理科大学留学生別科（以下、理大別科）では現在、中国、ネパール、バングラデシュ、パキスタン、スリランカ等のアジアを中心とする国々から留学生を受け入れている。別科は大学や大学院への進学を目的とする留学生教育機関であることから、理大別科としても大学本科への進学を希望する学生を中心に受け入れを行っている。だが、別科を修了した学生が実際に本科へ進むかと言うと、多くの場合そうではない。ほとんどの学生は、入学当初こそ本科進学を希望するものの、進学準備が本格化する9月頃には専門学校や短大を希望する学生が増え始め、その後、実際に進学するというケースが少なくなる。事実として、ここ数年の進学率を見ても、本科へ進む学生は全体の3割にも満たず、ほとんどは専門学校や短大へと進学しているのが現状である。理由は、日本語能力の伸び悩み、経済的な問題、家族や友人と同じ学校へ行きたいなど、学生によって様々である。

もちろん個人の意思は尊重されるべきであり、現場の教師としては、彼らが志望校に進めるよう支援するだけである。しかし、進路指導の場で留学生と接していると、彼らが果たして十分な情報をもとに適切な進路選択をできているのか疑問を抱くことも少なくない。大学へ進むか、専門学校、短大へ進むかは、将来のキャリア形成に直結する問題であるにもかかわらず、学生の多くが必ずしもそうした認識を持って進路を選択しているとは言い難いからである。実際に、経済的問題や日本語力といったやむを得ない事情を別にしても、「友人や家族のそばにいたい」という理由だけで同じ学校あるいは同じ地域の学校に進む者、「大手自動車メーカーで開発の仕事がしたい」と語りながら自動車整備士養成の専門学校に進む者など、進学後のキャリアを十分に見据えていないケースは例年少なからず見受けられる。

このような進路の決め方は、日本の一般的な感覚からすれば短絡的にも映るが、留学生がそうした選択をする背景にはどのような要因があるのだろうか。仮に、日本でのキャリア形成に関する情報不足にその一因があるとすれば、彼らが希望する将来に向かって必要かつ適切な選択ができるよう支援をしていくことが求められる。理大別科では、このような問題意識から、長期的な視点に立って留学生の進路選択を支援することを目的として、2024年度から本格的なキャリア教育を実施している。本稿では、2025年度に行ったキャリア教育の内容と、その後に実施したアンケートから得られた学生の反応について報告する。また、キャリア教育と併せて行った進学、就職および日本への定住に関する意識調査についても結果をま

とめ報告する。その上で、留学生の進路指導にあたって求められる視点と支援の在り方について検討したい^{注1}。

2. キャリア教育とアンケート調査

2.1. 日本への定住と進学、就職に対する意識調査

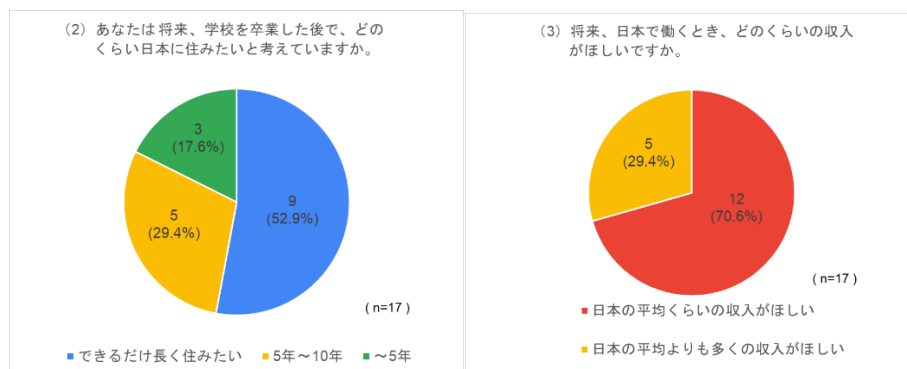
先述のように、理大別科では修了生の多くが専門学校や短大へ進学している。もちろんそうした選択も、日本での長期滞在を予定しない場合や大卒を前提としないキャリアを想定している場合には問題にならない。そうであれば、キャリア教育を実施すること自体あまり意味を成さない可能性もある。そこで、進学や就職、日本への定住について留学生が実際にどのように考えているかを把握するため、キャリア教育の実施に先立ち意識調査を行うこととした^{注2}。アンケート調査の質問は、以下の7項目である。

- (1) あなたは将来、日本でどんな仕事がしたいですか。(自由記述)
- (2) あなたは将来、学校を卒業した後で、どのくらい日本に住みたいと考えていますか。
(できるだけ長く住みたい／10～20年／5～10年／～5年)
- (3) 将来、日本で働くとき、どのくらいの収入がほしいですか。(生活できる収入があればいい／日本の平均くらいの収入がほしい／日本の平均よりも多くの収入がほしい)
- (4) あなたは日本の大学または大学院に入りたいですか。(はい／いいえ／どちらとも言えない)
- (5) 日本の大学や大学院に進むことについて、あなたにとって一番問題になることは何ですか。(お金／日本語力／卒業するまでの時間／自分の学力／その他)
- (6) 日本の大学や大学院に進むことについて、あなたにとって日本語力以外で一番問題になることは何ですか。(お金／卒業するまでの時間／自分の学力／その他)
- (7) 日本に来る前に大学や大学院の学費がいくらか知っていましたか。(はい／いいえ)

上記のアンケート調査は2025年5月末に実施し、別科生17名(スリランカ6名、バングラデシュ6名、パキスタン3名、ネパール1名、中国1名)から回答を得た。

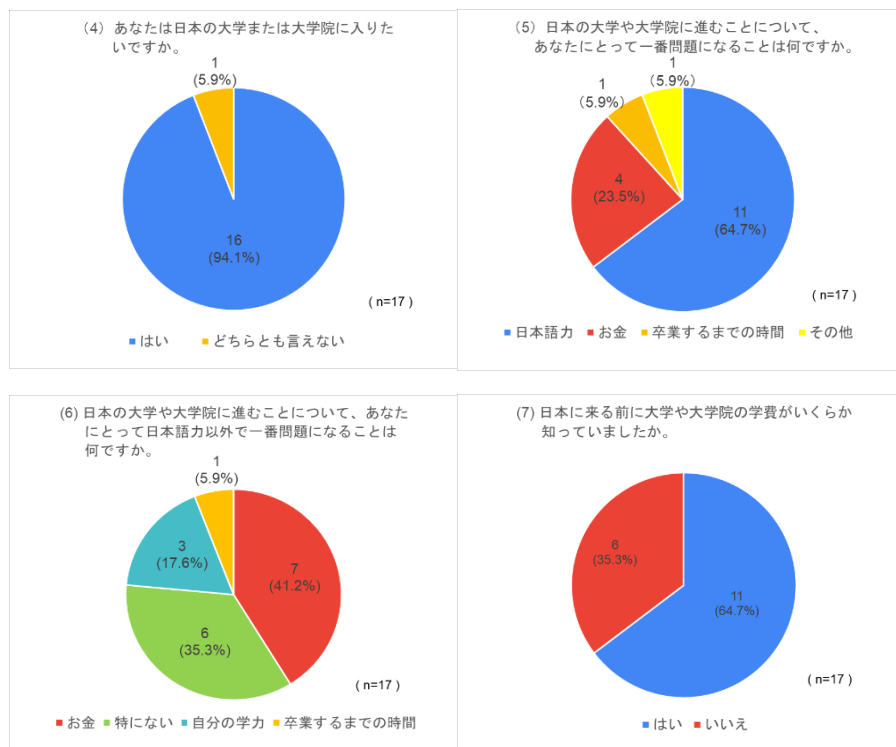
以下で結果を見ていく。まず(1)「希望する職業」については、ソフトウェア開発やゲーム開発、データサイエンスといったIT関連を挙げた学生が7名と最も多かった^{注3}。次いで多かったのは、自動車関係の4名であり、「自動車エンジニア」や「車の会社の仕事」といった回答が見られた。そのほかは「電気通信エンジニア」「機械エンジニア」「教員」「ホテル関係」「ビジネス関係」が各1名、未定が1名という結果であった。これらの職業は、いずれも大卒資格が必要というわけではないものの、一般的には大卒で好待遇やキャリアアップが望める職種である。また、自動車関連の「車の会社」という回答については、メーカー本社勤務、ディーラー勤務のどちらを意図しているか明確ではないが、前者を想定しているならば、大卒資格は必須となる。

次に、(2) および (3) の回答を見ていく。結果は以下の通りとなった。



まず (2) 「将来日本にどのくらい住みたいか」については「できるだけ長く住みたい」とした学生が 9 名 (52.9%) と最も多く、次いで「5～10 年」が 5 名 (29.4%)、「5 年まで」が 3 名 (17.6%) という結果であった。また、(3) 「将来どのくらいの収入がほしいか」では「平均くらいの収入」と答えた学生が 12 名 (70.6%)、「平均よりも多く」と答えた学生が 5 名 (29.4%) であった。これらの結果から、多くの学生が将来的に日本での中長期的な滞在を考え、平均以上の収入を望んでいることが分かる。

次に、(4) ～ (7) の結果を見ていく。結果は以下の通りであった。



まず (4) 「大学または大学院に進学したいか」については「はい」と回答した学生が 16 名 (94.1%)、「どちらとも言えない」が 1 名 (5.9%) であった。また、(5) 「進学にあたり最も

問題となること」では、「日本語」と答えた学生が 11 名 (64.7%) と最多であり、次いで「お金」4 名 (23.5%)、「卒業までにかかる時間」1 名 (5.9%)、「その他」1 名 (5.9%) という回答であった。「その他」と回答した学生は「日本語とお金」を理由に挙げていた。次に、(6) 「日本語以外で最も問題になること」では、「お金」が 7 名 (41.2%) と最も多く、「特にない」6 名 (35.3%)、「学力」3 名 (17.6%)、「卒業までにかかる時間」1 名 (5.9%) であった。一方、(7) 「来日前に学費を知っていたか」については、全体の約 3 分の 1 にあたる 6 名 (35.3%) が「いいえ」と答えていた。なお、この 6 名のうち 4 名は (5) または (6) で「お金」を進学上の問題として挙げている学生である。以上の結果を見ると、調査時点においては大多数の学生が大学や大学院への進学を希望している一方で、実際の進学にあたっては日本語能力や金銭面で不安を抱える学生が多いことが窺える。ただし、金銭的な不安を示した学生の中でも一部は、来日前に学費を把握していなかったことから、不安を感じつつも必要な情報収集を必ずしも行っているわけではないことがわかる。

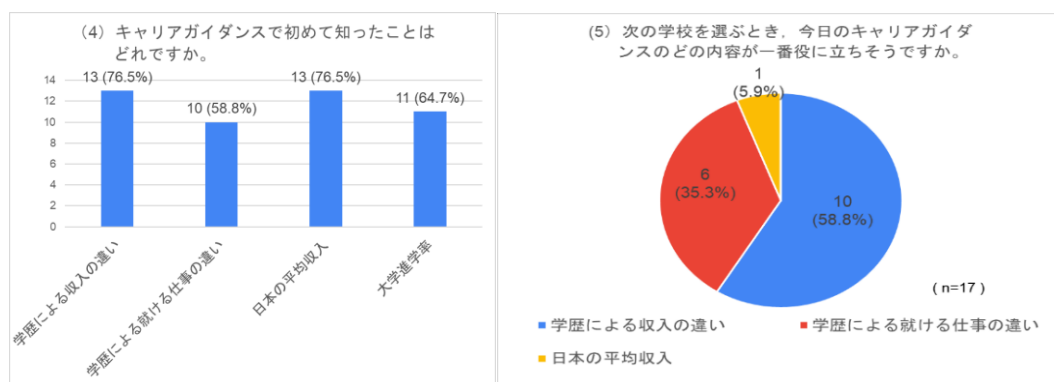
2.2. キャリア教育と事後アンケート

次に、キャリア教育の内容と事後アンケートの結果について見ていく。キャリア教育は進学準備が本格化する前の 6 月初旬に、学内キャリア支援センターの協力を得て約 90 分のガイダンス形式で実施した。ガイダンスは、キャリア支援センター長と、ゲスト講師として招いたハローワーク岡山の職員が担当した。内容は、学歴による賃金や就ける職種の違い、日本の大学進学率、留学生の就職率、就労ビザの種類など、留学生が日本でキャリア形成を考える上で基本となる事項である。ガイダンスには日本語能力が高くない学生には難解と思われる部分もあったため、直後の筆者の授業でフォローアップを行い、生涯賃金や平均年収に到達する年数などを学歴別に補足解説した。以上の実践の後、キャリア教育について事後アンケートを実施し、参加した上記 17 名から再び回答を得た。質問は次の 5 点である。

- (1) 今日のキャリアガイダンスはどうでしたか。(とてもよかった／まあまあよかった／あまりよくなかった／全然よくなかった)
- (2) 今日のガイダンスで学んだことは、これから次の学校を選ぶとき、役に立つと思いますか。(はい／いいえ／どちらとも言えない)
- (3) 今日のキャリアガイダンスを受けて、大学や大学院に入りたい気持ちは、どう変わりましたか。(高まった／変わらない／下がった)
- (4) キャリアガイダンスで初めて知ったことはどれですか。当てはまるものをぜんぶえらんでください。(学歴による収入の違い／学歴による就ける仕事の違い／日本の平均収入／大学進学率／その他)
- (5) 次の学校を選ぶとき、今日のキャリアガイダンスのどの内容が一番役に立ちそうですか。(学歴による収入の違い／学歴による就ける仕事の違い／日本の平均収入)

／大学進学率／その他)

以下で結果を見ていく。まず、(1)「キャリア教育自体の評価」については、「とてもよかった」11名(64.7%)、「まあまあよかった」6名(35.3%)、(2)「キャリアガイダンスが進路選択に役立つか」については、「はい」16名(94.1%)、「どちらとも言えない」1名(5.9%)となり、ほとんどの学生が今回のキャリア教育を肯定的かつ有用と評価していた。(3)「進学意欲の変化」については、「高まった」14名(82.4%)、「変わらない」3名(17.6%)で、ガイダンスによって進学意欲が高まったという学生が多数を占めた。次に(4)、(5)の結果を以下に示す。



(4)「キャリアガイダンスで初めて知ったこと」については、「学歴による収入の違い」「日本の平均収入」が13名(76.5%)と最も多く、「日本の大学進学率」11名(64.7%)、「学歴による就ける職種の違い」10名(58.8%)という結果となった。基本的な内容ではあったが、ガイダンスで扱った事項を初めて知ったという学生が多かったようである。また、(5)「進路選択において最も役立つ内容」については、「学歴による収入の違い」10名(58.8%)、「学歴による就ける職種の違い」6名(35.3%)、「日本の平均収入」1名(5.9%)という結果で、特に学歴とキャリアとの関係に関する内容を進路選択において有益と感じた学生が多かった。以上のアンケート結果から、将来の展望とは対照的に、実際のキャリア形成に関しては留学生は十分な知識を持ち合わせていなかったことが窺える。

3. 実践と調査結果から見てきたこと

以上の調査結果から示唆されると同時に、今回の実践を通して強く実感したのは、留学生に対する早い段階でのキャリア教育の必要性である。今回の調査で明らかになったように、学生の多くは、日本での長期滞在を望み、平均的な収入を得たいと考えている一方で、日本の平均年収や学歴による生涯賃金、就ける職種の違いといった日本でのキャリア形成を考える上で不可欠となる知識は十分に持っていなかった。つまり、将来の生活についての希望は持ちながらも、それを実現するための具体的な手段に関する知識は十分でなかったのである。

大学に進学するか、専門学校に進学するかは、将来のキャリア形成に直結する重要な選択であるが、その判断をする際に、こうした知識を欠いていることは、学生にとって大きな不利益となるのは明らかであろう。一方で、来日して間もない留学生が自力で得られる情報は限られており、進学準備が始まるまでの短期間にこれらの必要な情報を収集することは容易ではない。実際、筆者の指導する学生の中にも、家族や知人の紹介で進学先を決める者が少なくないが、そうした一元的な情報のみに基づいて進路選択をしてしまうことも、圧倒的な情報不足が一因としてあるように思われる。多くの留学生が日本での長期滞在を希望し来日する現状を踏まえるならば、彼らが将来、日本で思い描く生活を実現できるよう、長期的な視点を持って指導にあたること、その中で必要な情報を提供し、希望する進路に向け適切な選択ができるよう支援していくことは、留学生教育機関としての責務だろう。少なくとも、「知らなかった」という理由で彼らの将来の可能性が狭められ、後悔することがないように、十分な情報のもと、様々な選択肢を提示することは必要である。その意味で、来日後のできるだけ早い段階において、キャリア教育を実施し、留学生に自身の将来について真剣に考えてもらうこと、日本でのキャリア形成に関する基本的な知識を身につけてもらうことは、教育上、大きな意義があると考えられる。

他方で、今回の調査結果からは留学生の「情報収集への意識」に関して懸念も示唆された。調査対象の学生のほとんどは調査時点で大学あるいは大学院への進学を希望していたものの、約3分の1（6名）は来日前に学費がどの程度かかるかを把握していなかった。学費に関する情報は母国でも容易に得られるはずだが、事前に調べていない学生が一定数いたという事実は、彼らが自分自身の将来に関わることであっても、「自分事」として捉えられず、情報収集に対して受け身であることを示唆しているように思われる。実際、例年来日してから学費の高さを知って大学進学を断念する学生がいるが、そのような場合にも、他の進学先を検討するにあたって家族や友人に頼るケースが多く見られる。また、大手自動車会社で自動車開発に携わりたいと語りながら、自動車整備士養成の専門学校へ進学する事例もあり、こうした点からも進学後のキャリアに関して十分な情報収集ができていないことが窺える。自ら情報を収集し判断する力は、進路選択に限らず、進学後や就職後にも必要となる重要なスキルである。特に、社会的に弱い立場に置かれやすい外国人にとっては、その重要性は一層大きい。留学生が情報弱者に陥ることなく、日本社会で自立して生活していくためには、留学生が主体的に情報を取捨選択し、判断する能力を養う教育についても、キャリア教育と併せて今後検討していく必要があるだろう。

4. おわりに

今回の実践は学生から肯定的な反応が多く、別科生に対する進路選択支援として一定の成果があったと考えられる。留学生は外国人であるがゆえに情報弱者になりやすい現実があり、

進学やキャリア形成についてもその傾向は例外ではない。実際、今回のアンケート調査でも、学生が望む将来像と、それを実現するために必要な知識との間に大きな乖離があることが確認された。大学進学にせよ専門学校進学にせよ、留学生が希望する進路に進めるよう必要な支援を提供することは、留学生支援に携わる者として当然の責務である。しかし、その後の彼らのキャリア形成という点までを考えるならば、まず留学生が情報弱者に陥りやすいという現実を踏まえ、彼らが将来どのような生活を望むのか、ニーズを丁寧に把握した上で、その実現に向けて必要な情報を提供すること、主体的かつ適切な進路選択ができるよう支援していくことが重要である。留学生の「進路指導」と言えば、願書作成や面接対策といった実務的支援に偏りがちであるが、このように彼らの将来を見据えて長期的な視点から支援を行うこともまた、留学生を受け入れ教育する立場に求められる重要な視点ではないかと考える。今後は、今回の実践で得られた知見を活かし、早い段階からのキャリア教育を継続しながら、様々な選択の場面で留学生が主体的に思考し行動できるよう、必要な支援を行っていきたい。

注

注1 本稿は、第65回日本語教育方法研究会で発表した内容（宮口 2025）に追加事項を加えて論文化したものである。

注2 アンケート調査の実施にあたっては、得られたデータを研究目的で使用することを事前に説明し、参加者から同意を得ている。

注3 実際の回答は次の通りである。

「ソフトウェア開発に関連するもの。」「コンピューター会社で働きたいです」「IBM の会社」「デジタルゲーム/メディアコース」「Information Technology」「IT job」「As a data scientist」「自動車関連の仕事」「自動車エンジニア」「車の会社で働きたいです」「車の会社の仕事」「先生」「ホテル」「Telecommunication engineer」「mechanical engineer」「I want to do a business related job」「まだ決めてない。」

参考文献

宮口徹也（2025）「留学生別科におけるキャリア教育の実践－長期キャリア形成を見据えた進路選択の支援として－」『第65回日本語教育方法研究会誌』Vol.32, No.1, 2-3.

グローバル人材が集う研究拠点へ

—フロンティア理工学研究所とマプア大学の国際交流が育んだ学生成長の軌跡—

フロンティア理工学研究所 所長

赤司 治夫

1. フロンティア理工学研究所とマプア大学

岡山理科大学フロンティア理工学研究所（IFST）は、自然科学研究所と技術科学研究所を統合し、2019年に設立されました。理学と工学の融合を核に、基礎科学から応用技術開発、さらには社会実装までを一気通貫で推進し、大学発の知を産業界・地域社会・国際社会へ還元する研究拠点となることを目指しています（図1）。研究所では、「研究」「教育」「社会貢献」「国際化」を主要目標として掲げ、それぞれに関連するプロジェクトを進めています。

本稿では、研究所が国際色豊かな研究・教育拠点として発展することを目指し、マプア大学（フィリピン・マニラ）とともに築いてきた交流の歩みと、その中で生まれた学生成長の軌跡について紹介したいと思います。

マプア大学（Mapúa University）は1925年に Don Tomas Mapúa によって設立された歴史

岡山理科大学フロンティア理工学研究所のイメージ図

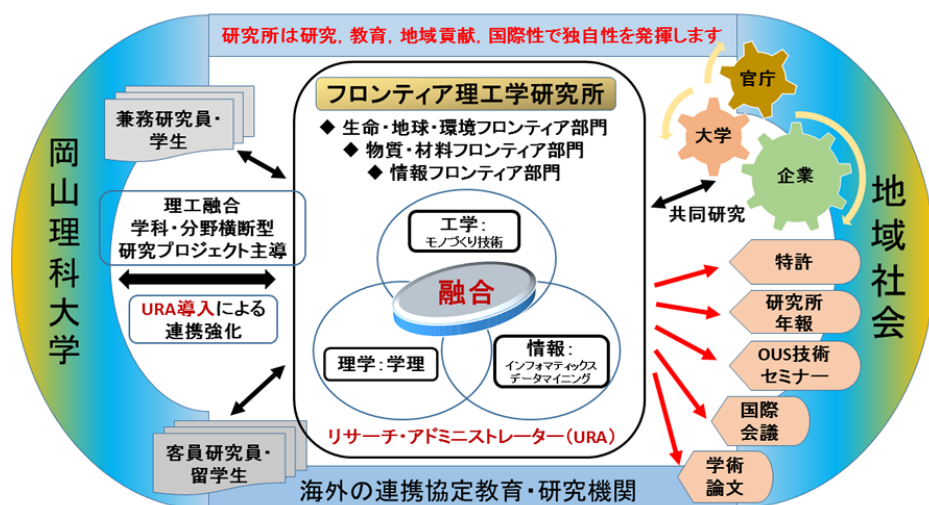


図1 フロンティア理工学研究所イメージ図

IFST ホームページより引用 (<https://ifst.ous.ac.jp/about/>)

ある工学・技術系の私立大学で、生物工学、化学工学、土木工学、電気・電子工学、機械工学をはじめとする幅広い専門分野を擁しています。さらに Arizona State University (ASU) との提携により、デュアルディグリー制度や国際教育プログラムを展開し、世界に開かれた教育環境を整えています。

2. 連携の始まりと学生の熱意

岡山理科大学は 2018 年、マプア大学と教育・研究連携協定を締結しました。これはマプア大学にとって初めての海外大学との正式な協定であり、両大学が理工系教育に共通の基盤（岡山理科大学は JABEE、マプア大学は ABET 認証）を有していたことが背景にあります。

翌 2019 年、私がマプア大学で開催された国際週間「Global Week」に参加したことが、私にとってのマプア大学との交流の始まりでした。イベントでは体育館に満席の学生が集まり、留学や国際交流への期待に目を輝かせている姿に触れ、その熱量に圧倒されました。

翌朝、夜明けとともに大学に到着してくる学生たちの姿を目にし、その理由を尋ねたところ、「毎朝 3 時に起きて通学している学生もいます」と職員から説明を受けました。マプア大学の学生たちの学びへの情熱と真剣さに深い感銘を受け、「この雰囲気、本学の学生にも体験させたい」「ともに学び合う場所をつくりたい」と強く感じました。

3. パンデミックと停滞、そして再始動

その直後、私の研究室に学んでいた学生が、マプア大学の語学研修プログラム（イングリッシュキャンプ）に参加し、帰国後の生き生きとした報告を聞くにつけ、両大学の学生の相性の良さを確信しました。しかし、まさに次の展開へ踏み出そうとした矢先、COVID-19 パンデミックにより計画は一時中断を余儀なくされました。交流の途絶は残念ではあったものの、再開への願いはむしろ強まっていきました。

2022 年、感染拡大が落ち着き始め、岡山理科大学建築学科が実施したさくらサイエンスプログラムが大きな成果を収め、本学とマプア大学の交流再開の第一歩となりました。その成功は研究所にとっても大きな励みとなりました。

4. オンライン交流と対面交流へ

2023 年、フロンティア理工学研究所では、マプア大学との研究・教育交流に向けた足掛かりを築くことを目標として、毎年研究所で開催していた国際会議「2nd OUS Frontier Symposium」を、初めてマプア大学の教員・学生にも公開する形でオンライン開催いたしました。その後、フロンティア理工学研究所とマプア大学が共同で主催する初めての学術集会となる「1st OUS-Mapúa Colloquium on Metallic Compounds and Coordination Chemistry」をオンラインで開

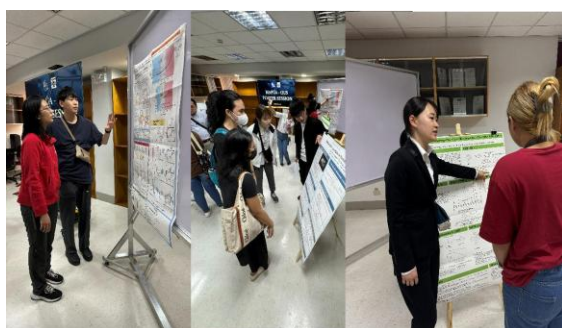
催することもできました。このコロキウムでは、マプア大学から Professor Menandro C. Marquez と Dr. Kathalia De Castro-Cruz のお二人に講演を頂き、本学とマプア大学から約 270 名が参加するなど、大変活発な議論が行われました。

しかしながら、オンラインを通しての交流には、参加者の熱量や空気感を十分に共有しきれないもどかしさも残りました。とくに、岡山理科大学からの参加者が全体の参加者の 1 割にも満たなかった現実、国際的研究・教育拠点を目指す研究所として、もう一段の飛躍が必要であることを痛感させました。この経験が、「次は必ず対面で交流を実現したい」という強い動機につながりました。

その思いを胸に、2024 年には研究所として初のマプア大学訪問団（教員 3 名、大学院生 5 名、グローバル教育センター職員 1 名：計 9 名）を結成し、私自身も参加して、マニラにて「2nd OUS-Mapúa Colloquium」



2nd OUS – Mapúa Colloquium 会場風景



ポスター発表会場風景



2nd OUS – Mapúa Colloquium 終了後の記念撮影

を開催しました。研究発表と学生によるポスターセッションでは、時間を忘れるほど熱のこもった議論が続き、学生たちは当初こそ原稿や翻訳ソフトに頼りながらも、次第に自分の言葉で英語による議論に挑戦し始めました。その変化はとても印象的で、会の終了後の記念撮影で浮かべた学生たちの誇らしげな笑顔は、対面交流の持つ力を象徴するものでした。

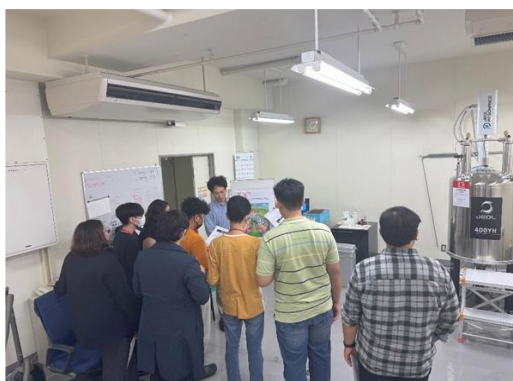
帰国後、マプア大学での経験を面接で堂々と語ったことが高く評価され、第一志望企業への内定を受け取った学生、悩んでいた博士課程進学を決断した学生、そして、国際会議で優秀ポスター賞を受賞した学生など、フィリピンで頑張った学生たちからのうれしい報告が相次ぎました。わずか数日間であっても、学生たちが確かな成長と自信を手にしたことを実感しています。

5. さくらサイエンスプログラムと交流の深化

こうした交流の積み重ねを土台として、さくらサイエンスプログラム「先端医療材料を巡る技術体験 ― 基礎研究から応用まで ―」が採択され、マプア大学から7名の学生と1名のスタッフを岡山に迎えることができました。参加した学生たちにとっては、幹細胞培養の実習、タンパク質結晶作製の実験、今治キャンパス獣医学部でのバイオマテリアルとしての細菌がもつ可能性に関する研究紹介など、フィリピンではなかなか経験することができない、研究の基礎と最前線の両方を実際に体験し、研究者の視点と緊張感を肌で感じる貴重な時間となりました。



ヒト幹細胞培養実習風景（播種）



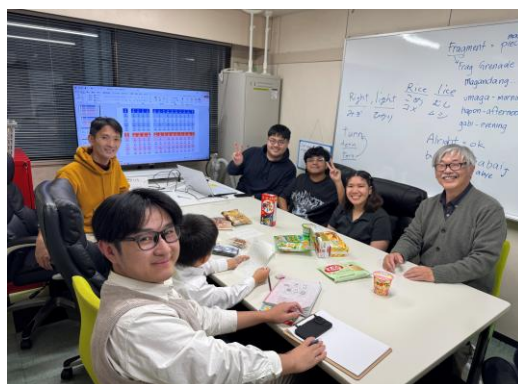
核磁気共鳴スペクトル測定装置見学風景

現在、さくらサイエンスプログラム参加者のうち2名の学生が、研修生として来日し、フロンティア理工学研究所の研究室に在籍して、修士論文執筆に向けた研究に取り組んでいます。研究室に所属していた本学の学生にとっても、外部から優秀な学生が加わることで生まれる良い緊張感が研究室の空気を引き締め、互いに刺激し合いながら、研究進めていくことができます。研究室の中では、学生同士が互いの母国語を教え合いながら交流する



さくらサイエンスプログラム先端医療材料を巡る技術体験—基礎研究から応用まで—

“English-Japanese Café” も自発的に始まりました。週に一度、夕方に集まり、日常表現から研究用語までを教え合う時間は、単なる語学練習にとどまらず、互いの文化や考え方に触れる貴重な機会となっています。こうした取り組みは、学生たちの国際的視野を着実に広げ、学びへのモチベーションをより高める結果につながっています。これらのことに加えて、研究室の日常に関する留学生自身による SNS での情報発信が、マプア大学の学生にとって日本の研究室を知る貴重な情報源となっています。



English-Japanese Café の様子
岩井良輔研究室 フロンティア理工学研究所

さらに 2025 年には、マニラにて「3rd OUS-Mapúa Colloquium」を開催し、オンライン参加を含め 400 名を超える参加者が集まりました。会場は議論の熱気で終始活気に満ちていました。本学の学生 2 名がポスター賞を受賞するなど、学生の活躍が印象的でした。

コロキウムを終了後には、マプア大学の 2 名の学生から、本学研究室での研修希望が寄せられ、現在受け入れに向けた手続きが進んでいます。そのうち 1 名はフロンティア理工学研究所で、もう 1 名は今治キャンパス獣医学部獣医学科の研究室で研修を行う予定です。こうして研修先が研究所内にとどまらず学内全体へと広がり始めたことで、マプア大学との人的交流が確かな広がりを見せており、研究所が国際交流の拠点として果たすべき役割の重み

と可能性を改めて感じています。

フロンティア理工学研究所を起点とした、岡山理科大学とマプア大学の人的交流は、着実な歩みとともに次のステージへ向かいつつあり、未来に向けた新たな展開の予感を強く抱いています。

6. 結びに代えて

交流を重ねる中で改めて実感しているのは、フロンティア理工学研究所にとって、海外との協働とは、単に研究を国際化するための仕組みではなく、そこに学ぶ学生一人ひとりの未来を開く力を育む営みであるということです。異国の大学での挑戦の中で育まれる勇気、異文化を越えて交わす議論、仲間との切磋琢磨。そのすべてが、教室の中だけでは得られない学びとして確かに存在しています。

フロンティア理工学研究所は今後も、継続的な学生交流、国際共同研究、共同教育プログラムの構築などを通じて、世界から素晴らしい人材が集う、研究拠点として発展してまいります。

本稿で紹介した、フロンティア理工学研究所の取り組みが、未来の国際協働の新しい可能性へとつながることを願っています。

【編集後記】

「国際教育研究フォーラム」第105号では小山悦司所長、宮口徹也氏、赤司治夫氏の3編のエッセイを掲載しました。小山所長は国際教育機関によれば2025年に日本人の英語力が最低ランクに分類された。我が国では英語力向上に向けて2022年度から高校教育で「コミュニケーション力」の育成を重視する方向が示され、そこで期待されるのが生成AIの活用であり、語学教育を「知識の習得」から「実際の活用」へと転換させる大きな可能性を秘めていると述べています。また宮口氏は留学生別科学生の入学時の進学希望と就職先に乖離がみられることから、留学生の進学・就職に対する意識調査と、キャリア教育実施後にその効果を調べる意識調査を行い、これらの意識調査を踏まえて、進路指導の在り方について述べています。さらに赤司氏はフロンティア理工学研究所（IFST）と岡山理科大学の研究・教育連携提携校であるマプア大学（フィリピン）とが共催する国際会議に参加した学生の成長の軌跡を踏まえ、当研究所は人的相互交流による国際協働を推進する研究拠点として発展していくと述べています。

今回掲載しました3編はテーマが異なりますが、グローバル教育の視点から捉えると共通点があります。その意味で、3編とも読み応えのあるものになっており、興味を持って読んで頂けると確信しています。（T.A.）

編集・発行：国際教育研究所
〒710-0821 倉敷市川西町11-30
加計国際学術交流センター内
TEL (086) 423-1611(代)
URL : <https://www.kake.ac.jp/iie/>
e-mail : iie@edu.kake.ac.jp